

Oyama Rogyu

# 大山魯牛

栃木の南画Ⅱ  
足利市立美術館コレクションによる

2010年10月23日(土)～12月12日(日)

開館時間… 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

会期中無休

入館料… 一般700(630)円、大高生500(450)円、

中学生以下は無料

(一)内は20名以上の団体割引料金

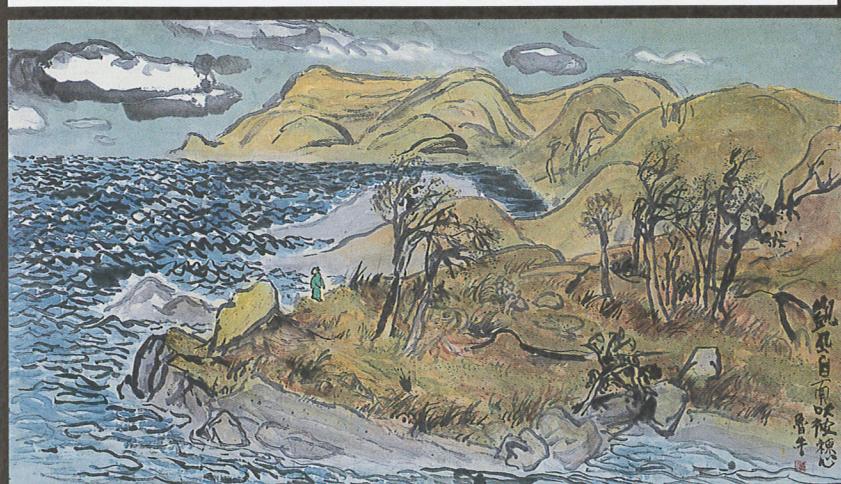
財団法人小杉放菴記念日光美術館／日光市

日光市教育委員会／下野新聞社

協力… 足利市立美術館

小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 日光市山内2388-3 TEL.0288-50-1200



## 栃木の南画Ⅱ 足利市立美術館コレクションによる

# 大山魯牛

このたび、小杉放菴記念日光美術館では、2004年に開催した「栃木の南画Ⅰ 栃木県立美術館コレクションによる石川寒巖」展に続く「栃木の南画シリーズ」の第2弾として、足利市ゆかりの南画家・大山魯牛の画業をご紹介する展覧会を開催いたします。

大山魯牛は、1902(明治35)年、東京市日本橋区米沢町(現・東京都中央区)に生まれ、生後まもなく、父の実家のある栃木県足利郡足利町(現・足利市)に転居します。1919(大正8)年、下野中学校(現・作新学院)を卒業後、上京して、小室翠雲が主宰する環堵画塾で南画を学びました。はじめは雅堂と号し、日本南画院や帝展を中心に作品を発表、新進の南画家として活躍します。

1935(昭和10)年、魯牛と改号してから終戦を迎えるまでは、銀座の資生堂画廊において、3年連続して個展を開催するなど、充実した生活を送りました。戦後は、一時、画家としての活動もままならない時期を過ごしますが、1955(昭和30)年、作品発表の場を新興美術院へ移し、本格的な制作を再開します。そして、1995(平成7)年に93歳の生涯を閉じるまで、終生、南画と真摯に向き合い、南画家として描き続けました。

半世紀以上にわたる魯牛の画業において、その画風は、幾度となく変化していきます。中国絵画に倣いながら、柔らかな描線で細部まで丁寧に描き込まれた初期の山水画から、写生に根ざした堅実な作品、さらに戦後の、力強い線と色面が印象的な洋画風の作品から、抽象的な心象風景が展開する作品へと続く変化の過程には、南画における自己表現を模索する魯牛の姿がありました。その画風は晩年、伸びやかな線による、脱俗的で自由な境地へとたどり着き、積年の辛苦も、独自の表現の確立へと実を結びました。

今回の展覧会では、魯牛の故郷にある足利市立美術館が、開館以来築きあげてきた大山魯牛のコレクションと併せて、ご遺族が所蔵されている貴重な作品と資料により、初期から晩年にわたる作品を一堂に紹介させていただくことで、生涯を南画と共に歩んだ魯牛の画業に迫りたいと考えています。

また、魯牛は、同郷であり、翠雲門下の先輩となる石川寒巖と親交が深く、そのつながりから小杉放菴とも交流がありました。魯牛と寒巖は、1932(昭和7)年より、放菴が主宰する「老荘会」という、中国の古典を学ぶ会にも参加しています。この老荘会への参加が、魯牛の画風の変化の一過程において少なからず影響をあたえていたことも指摘されていることから、老荘会と魯牛のかかわりについても、改めて検証したいと考えています。

## 小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 日光市山内2388-3 TEL.0288-50-1200

KOSUGI HOAN  
MUSEUM OF ART,  
NIKKO



《柘榴》1924(大正13)年



《どじょう》1930年代後半



《遊ぶネコ》1955(昭和30)年



《突兀》1960年代初



《秋爽》1962(昭和37)年



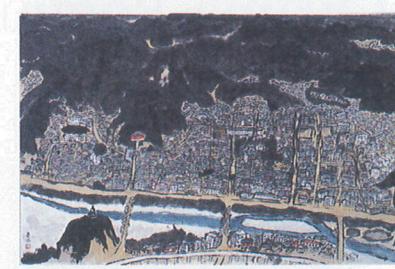
《郊外》1969(昭和44)年頃



《半俗半仙》1970(昭和45)年 個人蔵



《雪つもる》1990(平成2)年



《望郷》1991(平成3)年



《薔薇》1992(平成4)年 個人蔵

### 関連イベント

ギャラリートーク「大山魯牛の画業について」

講 師：足利市立美術館学芸員 江尻潔氏

日 時：平成22年11月27日(土)午後2時から3時

場 所：小杉放菴記念日光美術館展示室

参加料：美術館の入館料のみで参加できます。

参加の際は、当日の午後1時50分までに、  
美術館受付へお集まりください。

### 交通案内

東武日光駅、JR日光駅から清滝・細尾、  
中禅寺・湯元、西参道(東照宮)方面行きバス5分  
「神橋停留所」下車、徒歩3分  
日光宇都宮道路・日光インターから約2km

